

# 町家合宿 in 京都 vol.5

## ～古着交換についてその②～

山下桂永子

### ☆感想文に見る古着交換

11年間続いている町家合宿では、どこに行くのか、何をするのかは、基本的には当日参加者の希望を聞きながらすすめていく。その中で、あらかじめ行うことを決めていて、初回から毎回行っているイベントが「古着交換」である。

行き当たりばったりの町家合宿の中で、この古着交換は、唯一何をどうするのかという見通しが持てる（どうなるのかはわからないけれど）ものであり、2日目の午後にそれがあって、そこにたどりつけばなんとかなるさという、その見通しが私に大きな安心を与えてくれているし、2泊3日乗り切る支えになっているように思う。

毎年任意で書いてもらっている町家合宿の感想文には、古着交換のことが書かれていることがとても多い。参加者本人だけでなく、保護者の感想文でも、参加者が帰宅したあとに、古着交換のことを多く語っていたこともよく書かれている。今回はその一部を抜粋して、その時の参加者の様子とともに紹介したい。

#### Aさん1回目

「普段スカートはいたこと無いから、すごい緊張した。」

#### 2回目

「この日は、楽しみなような楽しみじゃないような複雑な気持ちで家から町家に行きました。理由はもちろん古着屋でのイベント。でも楽しみが勝ってた気がします。」

「古着屋さんでは1人で不安だったのでKさん（筆者のこと）につきまよってました。でもワクワクでした～。楽しかった！」

「今年はスカートじゃなかったのが去年のように緊張はしたけどパニックにはならずすみません(^\_^)」

「駅で他の人たちを待って、探してる時楽しかった！」「去年と同じくこの瞬間の嬉しさというか楽しさというかは忘れられんもんがあります。」

#### Aさん母

「参加するかどうかをギリギリまで迷ってました。古着屋さんでのことが印象深かったようです」

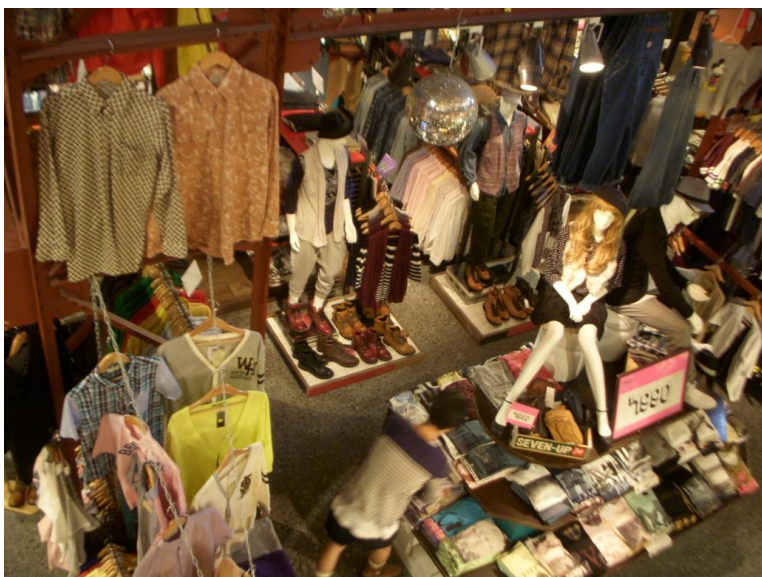
## ☆Aさんの古着交換

Aさんは、10年程前、中学校3年生と高校1年生のときに参加してくれた女の子である。Aさんは不安と緊張で、初回の夜はなかなか眠ることができず、真夜中に「せんせい、おきてるの？ねないの？」と私に聞いてきた。私は「おきてるよ、2日ぐらい私は寝なくてもだいじょうぶだよ」などと笑って返していた。何とかAさんに安心してもらいたいと思って言葉を返していたのだが、体力の衰えとともに最近では真っ先に寝ようとする今の私には到底言えないセリフである。

古着交換では、普段はスカートをはかない少年のような風貌のAさんが、ワンピースに麦藁帽子という、一気に可憐な少女に変身したことで、他の参加者やスタッフからも大絶賛であった。Aさんはその喝采に恥ずかしながらも笑顔で応え、それまでかたくなに拒否していた写真撮影にも、古着を着たときには自然な笑顔で写ることができていた。

Aさんは体調不良もあって、2回目の参加を当日まで迷っていたようだったが、結果的には、2回目は、夜は町家には泊まらずに自宅に戻り、翌朝の出発に合わせてまた町家に来るという形で参加してくれた。1回目に夜に眠れなかったのがかなりつらかったのだと思うし、それでもどんな形であれ、参加しようと思ってくれたことは、私にはとてもうれしいことであった。

今にして思えば、Aさんは新しいことや慣れないことに緊張や不安を感じやすい自分が、一体どうすれば少しでも安心し、あるいは楽しむことができるのかをしっかりと考えることができる子なのだなあ后感心する。古着交換でも、Aさんは1回目の経験から、私と一緒にいることで、古着選びの不安を乗り切ろうとしたり、1回目ほど緊張しなかったと冷静に振り返ることができている。そして「この瞬間の嬉しさと楽しさが忘れられん」と書いてくれるほど、自分の選んだ服を着た他の参加者を見ることや、変化した自分を披露するその瞬間を楽しんでいてくれていたようである。



古着屋の様子

### Bくん1回目

「服選びは、目的の服をさがすのが大変で、なかなか無くて、服選びで疲れはてていた。」  
「集まったときは、自分がけっこう普通な感じの服だったから逆に目だってるんじゃないかと思いました」「不思議な集団だったんだろうな」

### 2回目

「他人の服を選んでたので、けっこうなやみました。昨年もなやんでたなあ・・・」  
「自分で言うのもなんですが、選んだ服を着てみたら『あ、似合うかも』とか思ったりして。でもみんな似合っていましたね。楽しかったです」

### Bくん母

「買い物に行って古着屋さんが気に入ったこと、初めて会ったお友達と話が出来たことなど話してくれました。」

## ☆Bくんの古着交換

Bくんは、Aさんと同じ時期に何度か参加してくれた、Aさんより一つ年上の男の子である。Bくんは1回目の古着交換で、感想文の通り疲れ果てていた。2回目の感想文に「昨年もなやんでたなあ」と書いてあるが、悩んでいたなんてもんじゃない。苦悩、懊悩、疲労困憊で町家に帰ってぐったりしていた。2回目参加時も、古着交換をすることが私から告げられるや、驚愕の表情を浮かべた。言葉には出さないものの明らかに「今年もするのかー困った」という表情だった。それでもBくんはまじめな性格なので、誰かに相談するでもなく、黙々と古着を選んでいたが、1回目の時ほどの苦しさはなく、(まあそれでもそこそこ辛そうだったが)、感想文では「楽しかったです」と言える余裕さえ見せている。

AさんとBくんは、普段寡黙なBくんが、古着交換で変身したAさんを見て、はっきりと「めっちゃかわいい！」と言っていたことが印象深い。家に帰ってからもAさんのことを、「かわいかった。あんなサラサラの髪見たことない」と言っていたようで、その1ヵ月後になんとBくんがストレートパーマをあてたという話をお母さんからうかがった。古着交換での、辛いけれど、大変だけれど、自分だけではなく、他の誰かの変化を楽しんでいると喜ぶ合う、その雰囲気、Bくん自身にも変化をもたらしたのだと思う。



古着をプレゼントされる場所。

Cさん1回目

「買ってもらった服をきる・・・ふわふわすかーと・・・」

2回目

「Y先生（筆者）ゴメン、またサイズ考えないでMensものかってしまって・・・。」

「帰ってきて、しましまニーハイはいてみた」

Cさん母

「古着の交換はY先生だったと服を見せてくれました。去年のはあまりに可愛すぎて思い出に置いてますが、今年のスカートははくのでレギンスを買ってほしいと言われました。Bくんはとてもかっこよくて〇〇〇〇〇（男性歌手）みたいだった、などなど言っていました。

### ☆Cさんの古着交換

Cさんは、何度か町家合宿に参加してくれていたが、なぜか古着交換ではこのとき2年連続私とペアになっている。Cさんは小柄で髪はショートカット、普段は黒っぽい服装だったので、明るいかわいらしい服装をしてほしいと思い、選んだところ、1年目は着てはくれたものの、普段の服装とはかけ離れすぎていたようである。2年目は少し色見は抑え目に、しかしながらミニスカートとニーハイソックスをプレゼントしたところ、町家合宿後にも身につけようと思ってくれていたと感想文にある。

古着選びは本当にとっても難しい。ただ普段のイメージと違う服装であればいいというものではないし、似合うと思ってもサイズが合わないこともある。Cさんとは長いつきあいで、よくよくお互いの普段の服装がわかっているだけに、思い切って方向性を振りきれない難しさもあった。そのときにペアになった2人の関係性というのも、かなり古着選びには影響しているように思う。



古着選びは真剣そのもの。

Dさん

1回目

「初銭湯は感動でした。何より楽しかったのはペアを組んで服を選ぶというイベント(?)」

2回目

「人をおとしめるのって楽しい! (笑)」

Dさん母

「ムシ刺されと、古着屋でコーディネート、銭湯でコーヒー牛乳とジャンプ(漫画)の話をしていました。充実した顔で帰ってきました」

Eさん母

「すごく楽しかったと言っていました。いままで他人の服を選んだり選んでもらったりしたことがなく、相手の事だけを思って集中できたようです」

#### ☆Dさんの古着交換

Dさんは高校生の時からの参加で、大学生に進学してからも何度か町家合宿には参加してくれた女の子である。あるときは、「バイトがあるので、二日目の古着から参加します」というぐらい、古着交換を楽しんでくれていた。しかも大学ではコスプレサークルに入っていたとも聞いている。Dさんの感想文からは、自分の変化を楽しみ、なおかつ、人を変えらるということを楽しめるようになっていくことがわかる。誰かが喜んだり驚いたりする顔を、その瞬間を想像して一生懸命選ぶことが、自分の喜びになることを「人をおとしめるのって楽しい」の一言で言いきるそのDさんの表現力に脱帽するばかりである。



古着を着て夜景散策へ。

#### ☆古着交換に思うこと

誰かと物をプレゼントし合い、身につけて披露しあう。そういうことが、普段の生活にもないわけではない。誕生日やクリスマスなど、半強制的な相互プレゼントシステムが発

動する場面は世の中にはたくさんある。しかしながら不登校やひきこもりの経験があると、人との関わりの機会が少なくなり、このプレゼントシステム発動の機会は減ることになる。しかも援助される側になりがちなのは彼らはプレゼントをされても、それを外で披露する機会は少なく（フリースクールの登校日に、古着交換でもらった装いで現れた参加者はいたらしい）、まして誰かにプレゼントをするという経験は本当に少ないのではないだろうか。

そんな中、遊びとはいえ、決められたルールの中で、誰かのために懸命に考えてプレゼントを選び手渡し、誰かが懸命に考えてくれたプレゼントを受け取り身につけるといふことに、変化は起きる。懸命に考えた自分が起こす相手の変化に期待し、懸命に考えてくれた相手へ自分の変化を贈り返す。そしてその変化は、町家合宿後にも起きているのだと、今回、古着交換に焦点を当てて、感想文を読んでみて改めて感じている。

**最後に、スタッフの K さんの感想を紹介する。**

「2000 円で洋服をコーディネートする。この時代、むちゃな。皆も高校生で、お財布にお小遣いだって入っている。黙っていれば、インチキして 2000 円以上の洋服を用意することだってできる。誰もインチキしなかった。ルール違反をしなかった。限られた中で、考えて動いて、自分の目的、欲求を達成する。これって、法律が張り巡った日本の社会で、自分のやりたいことを最大限に行うために、どうにか思考錯誤するのと一緒だなあと。気に入らないからといって、ルールは破れない。破っちゃいけない。欲求が叶わないからといって、怒らない、不貞腐れない、暴力を振るわない、落ちこまない。この力は生きていく上で本当に必要な力なんじゃないか、と思いました。」